秋田県生涯学習・社会教育研究大会　実施レポート

日時：令和８年１１月６日（金）　　参加者：６８名（うち市町村等から５６名）
会場：秋田県生涯学習センター　講堂

テーマ　地域のつながりづくりを支える社会教育の展開
～共生社会の実現を目指し、学び続ける人材の育成～

【午前 講演】　岩手大学教育学部 准教授　深作　拓郎　氏



『地域のつながりづくりと子どもの育ち』と題して講演されました。児童館と公民館の共通点、地域と学校の関係性など、現代の子どもを取り巻く現状と、それを支える社会教育の役割が語られました。「こども主体・こども参画」という視点から、「子どもの権利条約」や「こども基本法」にも触れ、大人の自己満足ではなく、子どもと一緒に考え合い、結果よりも過程（プロセス）を尊重する参画の重要性を強調するとともに、子どもたち自身による「自治」の育成の必要性についても語られました。また、子どもが守られていると実感できる場である「サンクチュアリ」と、少しルールから外れても社会が受け止めてくれる余白である「アジール」の両立、特に「アジール」に着目する必要性についても説明されました。社会教育は、既成の正解に照らし合わせる「答え合わせ」ではなく、地域の大人と子どもたちが対等に思いを交わし、「応えあえる関係」を育むことの大切さ、子どもを信じ「心は離さない」大人の姿勢が地域のつながりを生むと結びました。

【午後 実践研究発表】　①　秋田県生涯学習センター社会教育主事　小嶋　　聖
②　秋田県生涯学習センター社会教育主事　工藤　伸也

①『「一緒にできる」を生み出す学びの場づくり』～モルックの実践から見えてきたこと～



障害者の生涯学習を進めるためのプログラムの一つとしてスポーツに着目し、学びの場づくりに向けた取組としてモルックの実践を事例に説明しました。モルックの面白さや魅力について触れながら、障害の有無にかかわらず誰もが楽しむためには、使用する道具やコートの大きさなどを工夫してルールを人に合わせること、安心・安全な環境を整えることが重要であると、具体例を示しながら説明しました。ユニバーサルスポーツが学びの手段としての最適解の一つであること、学びの場づくりのために、「どうすればできるか」への発想の転換や「一緒に楽しむ仲間」へと認識を変えることの必要性など、横並びでつながる関係づくりを目指す上での大切な視点についてまとめました。結びに、当センターによる地域・関係機関等が主体となって企画・運営できる持続可能な体制づくりに向けた伴走支援についての提案で締めくくりました。

②『「当事者と共に考えること」から見えてくる社会教育施設の在り方』～街歩き体験学習を通して～



障害当事者との協働による「街歩き体験学習」の取り組みを通して、社会的障壁（バリア）への気づきと合理的配慮等について提案がなされました。車椅子利用者の視点に立った街歩きからはじまり、聴覚障害者の視点を取り入れたプログラムへと展開する中で、単なる擬似体験（不便さの体験）にとどまらず、当事者の声を聞き、当事者と共に学び合うプログラムへと進化させた経緯と成果を説明しました。社会教育関係者は「福祉の専門家ではなく学びの専門家であり、『どうすればできるか』といった視点に立ち、建設的対話（対等な話し合い）を通じて共に合理的配慮について一緒に考えるプロセスこそが大切である」と締めくくりました。

【午後 協議】　秋田県生涯学習センター主任社会教育主事（兼）チームリーダー　佐々木　伸



講演ならびに実践発表で得た学びを踏まえ、『地域のつながりづくりのために、私たちができること』をテーマとして、ワークショップを実施しました。ラウンド１では、参加者のこれまでの実践や地域活動をワークシートに書き出し、グループ内で紹介し合いました。テーブルウォークを実施し、他のテーブルで話し合われたことを全体で見合いました。ラウンド２では、これから挑戦したいことをワークシートに書き出し、その中から自身が最も魅力や可能性を感じたアイデアを１つ選び、参加者全員の思いや考えを集約しました。ワークショップのまとめとして、秋田県生涯学習センター社会教育主事の　**和泉　洋介**　が、地域社会づくりにおけるキーワードとして「アジール」と「サンクチュアリ」に触れ、「子どもの育ちだけではなく、大人にとっても自分の発言や存在が否定されずに受け入れられる安心感や心の余白があってこそ、自分の思いを表現し、他者と横並びでつながることができる」と話しました。最後に、近隣地域で手を取り合い、相互に尊重し合える学びの場を創出していくことへの期待が語られ、協議が締めくくられました。

【参加者アンケートより】（抜粋）
- 社会教育は「答え合わせでなく応え合える関係づくりが大切である」という言葉が印象的であり、今後の実践に生かしていきたい。
- 一緒にできる環境を整えるための細やかな工夫や、参加者に合わせてルールを変更して一緒に楽しむという考え方がとても参考になった。
- 当事者の声を聞く、活動を共にする、一緒に話し合うことが、共生社会の実現に向けて必要だと感じた。
- 近接エリアや各自治体での取組について意見交換でき、刺激とアイデアをもらうことができた。